「新藤先生、お話があります」

学校の廊下で声をかけてきたのは浅川麗子だった。抜けるような色白の目鼻立ちの整った美少女だ。スカートから覗く足はすらりと伸びて魅力的な脚線美だ。この美少女の乳房の形を知っている。まだ固さの残る熟しきっていない果実のような乳房だ。乳首はサクランボのようなピンク色をしている。股間の陰毛は薄毛で柔らかな漆黒の絹草だ。お尻の丸みも知っている。女性器の粘膜の色まで目にしている。

「二人っきりでお話をしたいのですが･･･」

麗子の表情はこわばっていた。

　由美は視聴覚室の鍵を手に麗子を案内するように校舎の階段を上った。校舎４階の視聴覚室は昼休みには誰も使用する者がいないだろう。麗子との時間は誰もいない隔離された場所がいいだろうと直感的に思った。

「昨日は母がご迷惑をおかけしました」

麗子は頭を下げた。さらさらの髪がはらっと麗子の美しい

顔にかかった。顔を上げた麗子は髪を整えた。つぶらな瞳にうっすらと涙が浮かんでいる。昨日の撮影会が思い起こされた。由美の顔が急に熱くなる。

「新藤先生にお願いがあります。これを入れたままで授業をしてください」

麗子の手には大人の玩具が握られていた。ローターという卵形のバイブだ。実際には使用したことはないが、学生時代に女友達がふざけて女子会に持ってきたことがあり、それが大人の玩具だという認識はあった。

「これを？」

由美はローターを見つめながら聞き返してしまった。

「･･･お願いします」

麗子がしゃがんだ。

「じ、自分で入れるわ」

由美は狼狽した。麗子の手で恥部に挿入されることは避けたかった。ローターを入れたままで次の授業をすることは既成の事実となって事は運んでいる。由美も麗子の申し出

を断れないと判断していた。しかし、入れるにしてもトイレで入れるつもりだった。

「それではだめなんです。わたし･･･命令されているんです」

麗子の表情は真剣そのものだった。麗子が入れようが、由美自身が自分で入れようが、彼女たちに分かるはずがないと言いたかったが、麗子の真剣な表情に気おされた。

「スカートをめくってください」

女子生徒が女教師に校舎内でスカートをめくるように言う。そんな非現実的な行為が当たり前のように展開していく。

「恥ずかしいわ」

ぽつりと口にした由美はスカートの裾を自らめくった。麗子の指がパンストとパンティにかかる。そして一気に下げられていった。股間に外気が触れる。麗子の顔が近かった。膝にパンストとパンティが絡まっている。

「先生、足を開いてください」

麗子にうながされ、由美は足を開いた。恥部はさらに露骨さを増して麗子の目に触れていることだろう。生活の中で同性の視線に触れることはある。しかしそれは恥毛に飾られた三角ゾーンだけだ。足を開き、女性器をさらけ出すことなどはない。学生時代に恋人と何度か性交をした。初体験は男性自身を受け入れる恐怖感と恥ずかしさが同居した混沌の中にいたが、愛する男性との性交が根底に確実にあった。だから恋人がもとめるがままに股間を晒した。恥ずかしくても愛がまさった。しかし、今の由美を支配しているのは羞恥の気持ちだけだ。かっと顔が熱くなる。スカートの裾をめくり上げている指に力が入っていた。

「入れます」

麗子はローターを口に含んで唾液をまぶしている。次に麗子の指が股間に触れてきた。由美は思わず下半身を後ろに引いた。それでも麗子の指は的確に由美の媚肉を捉え、陰唇をやさしくくつろげている。ローターがじわじわと埋められていく。膣に挿入され、さらに麗子の指で奥まで押し

込まれた。ぞくりと脊髄をおぞましい感覚が走る。その感覚が恋人との性交時に味わった感覚との接点を求める。恋人の男根が膣を貫く感覚･･･おぞましいだけではない由美の身体を熱くさせる淫らな感覚･･･由美ははしたない声が漏れ出そうになり、唇を噛んだ。

「絶対に入れたままでいてください。お腹に力を入れて押し出さないでください。検査があるんです･･･」

麗子はもう一度由美の膣に指を挿入し、確かめるようにローターを最奥へと押し込んだ。

「ううっ」

ローターは子宮口に密着するまで膣の最奥に押し込まれ、由美は不覚にも呻き声をあげてしまった。激しく狼狽しする。教え子に女の声を聞かせてしまったのだ。しかし麗子は無表情で、膝に絡まった由美のパンティとパンストを丁寧に直し

「ありがとうございました」

とその場で立ち上がった。由美は力の入っていた指を緩め、

めくり上げていたスカートを下ろしていく。異物が入っている感触がありありと伝わっていた。

「失礼します」

深いお辞儀をしてその場を立ち去ろうとする麗子にあわてて声をかけた。

「待って、麗子さん。あなた･･･だいじょうぶ？」

由美は麗子の手を握った。麗子と母親の恥ずかしい痴態が写された写真を何枚も見せられている。今は、握った麗子の手で由美の女性の部分に異物を埋められた。恥部も間近で見られた。二人とも瑠理と乙葉に辱められ、身を穢された。その被害者意識が親密な意識を由美の中に生まれさせている。